

現代日本小説大系

28

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第二十八卷

河出書房版

現代日本小說大系 第二十八卷

昭和二十六年六月十日 初版印刷
昭和二十六年六月十五日 初版發行

代著者 長 與 善 郎

發行者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河 出 孝 雄

編集者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
荒 正 人

印刷者 東京都文京區久堅町一〇八番地
大 橋 芳 雄

發行所

東京都千代田區
神田小川町三丁目八番地
株式會社

河 出 書 房

會員番號A二一〇一四番
電話神田(25)三一七四番

現代日本小說大系(重製)

改定 定價 貳百參拾円

地方賣價 貳百四拾円

河出書房

共 同 印 刷 株 式 會 社

目次

長與善郎

竹澤先生と云ふ人……………三

有島武郎

カインの末裔……………二〇六

實驗室……………二三三

生れ出づる悩み……………二四七

有島生馬

獸人……………二八九

解説（荒正人）……………三〇三

長與善郎

竹澤先生と云ふ人

亡父長與專齋の靈に捧ぐ

この書の基調を成す気分は

父から稟けたものと思ふから

自序

大正十二年の震災當時、自分は家族を連れて信州に居り、交通が許されぬ爲め鎌倉に歸る事も東京の兄弟友人等の安否を知る事も出来ず、丁度長野にある妻の里に在り一週間程滞在して七日頃漸く一人上京し、又鎌倉に行つた。つづれた家を一通り片づけて、たしか十五日頃だつたと思ふ。一旦長野に引き返へず貨物列車の中で、自分は眼前を疾り去る悠々たる山河と雲とをながめ乍ら、ふつと『自分の道徳』と云ふものを一つ書いて見度い、書いておき度いと云ふ望みが切にかんだ。

素より震災と云ふ外的な刺激が無かつたならば自分はこの「竹澤先生」を書かなかつたであらうとは考へられない。この作の内容は何れ何かの形に於いて早晩生れ出づべきものであつた事は疑へない。かの怖ろしい災難の経験をその場に祇めたわけでもなく、又自分の周圍に運よく一人の悲惨な遭難者をも見ずに済んだ自分は、多くの人にとつてかくも忘れ難いこの大惨禍によつて實感上さ程に打撃をうけもせず、従前通り呑氣であつた。それ故自分はこの大事件を敢へて記念として「竹澤先生」にも経験させておいたが「竹澤先生」はそのために大した痛痒を感じない事になつてゐる。

但、原因は何處にあるか知らぬが、兎も角恰度その當時から自分は元來自分にとつて最も深き興味ある問題であり、而もそれ迄切實に實驗し得ずにゐた怖るべき問題に直面し、ど

うにかしてそれを切り抜ける事を促された事は事實である。「竹澤先生」が通過した神觀の經程と、虚空觀とが即ちそれである。(自分はこの虚空觀を以て自分の神觀の一特色をなすものと自認してゐる。)そしてその神觀乃至虚空觀と、宇宙觀との基礎の上に自分の道徳觀、處世觀が再び明瞭に自覺された。

即ち自分の道徳觀は、自分の神觀乃至宇宙觀——人間と世界との關係、全體なる宇宙の中に於ける個體の位置とその運命についての確實なる認識——から切り離しては成立し得ないものである。故に自分にとつて道徳觀は直ちに世界觀であり、人世觀であり、又宗教である。而していつ死ぬか分らぬ自分は、何はさておき自らのためにそれを明かにして、はつきり書きとめておく事が今更に急務と感ぜられた。

かくて自分はこの作に取りかゝるに先だつて、その現在に於ける自分の世界觀なるものの一端を『余の宗教への前提』と云ふ一小論に草した。そして自分の神觀、乃至宗教をいくらか明かにした。しかしその思想は未だ甚だ未熟であり、表現も部分的であつた。自分はいづれ「竹澤先生」の中にそれを更に練り、更に總括的に書いて見る心算であつた。而して自分はそれを唯一篇の乾燥なる論文として認めず、一個の人格の生活に當てはめ、一の實踐的に生ける思想として、誰が讀んでも分り易く、且つおのづから興味と愛とを持ち得るやう出来るだけ平易にくだいて自由に具體化して見度いと云ふのが最初からの希望であつた。かくて自分はこの作の形式を小説にしたわけである。

かくして誕生したる此作が普通の小説と類を異にする事は云ふ迄もない。これは一の生活の記録である。而も表面は甚だ平穩にして坦々たる生活である。素より物語の筋の波瀾曲折、調子の高低變化をのぞむ者はその單調に倦むであらう。

又當然感想議論の多い事に僻易するであらう。かゝる類の讀者は元々此小説の讀者たるべき人ではない。感想議論を抜きにしては始めから此作は生れないものだからである。而も自分は此作を書き上げた今、この作を以て決して小説ならざるものとは思つてゐない。尤も小説でないと云はれたところで自分は一向痛痒を感じないが、この一風變つた而も困難なる創作上の試みに於て、自分は内心案外にうまく成功した事をひそかに自認し、よろこんでゐるものである。

又假りに寫實的に見るも、現代の吾人の實生活は多く文壇人が定論としてゐる如く、それ程に思想を抜きにしたものでは有り得ない。何かしら思想上の領域にふれずに、吾等は殆んど一日を過ごす事が困難である程、折にふれて或る感想を獲、又語る事は吾等にとつて極めて自然である。而して吾等がそれを意識せざるのは、唯その感想が餘りに平凡であつたり、又それを語る事が吾等にとつてそれ程迄に自然の事たるにすぎない。

餘論はさておき、かくて自分は此作に於て自分の理想的人物を書かうとしたのではない。むしろ唯現在に於ける自分の主觀を表現する目的のために「竹澤先生」及びその周圍の人物を假想したにすぎない。勿論創作家としての自分は此作の執筆中にも、この作の性質と内容とに適應せぬ他の多くの自

分のエレメントの衝動から幾多のものを製作したが、而も最も落ちついた氣分と、最も眞なる自己意識との裡に沈潜し、ひたつて筆を執り得たのは此作であつた。他の作を書き了へて此作に戻る時、自分は恰かも自分の家に歸つた如き安泰を味はつた。即ち「竹澤先生」は最も落ちついてゐる時間に於ける、現在の自分の姿であると云つてよい。

尙ほこの作は昨年四月雜誌「不二」の創刊號より丸一年有半に互つて連載した長篇に多少の添削を加へたものである事を茲に書き添へて置く。

大正十四年九月十八日

長與善郎識

前篇

竹澤先生の顔

一 はしがき

『竹澤先生と私』

かう云ふ一つの題目が、決定的な氣持ちでふつと自分の頭にかんだのは、實に告別式の當日、先生の遺族と吾々ごく親しい者だけが先生の柩の後に蹤いて、曇のふる中を墓地へ行くあの途中の俤の中でであつた。人間はどんな哀しみのさ中にも何を考へるかわからない。玄關から棺を柩車へうつす時、白無垢を著た奥さんと可愛い二人のお嬢さんが、泣きながら手を合はせて拜むのを見て、又も泣かされた自分は、あの長い道中では、もう先生について何か書くと云ふ事の考へで頭が一杯であつた。

尤もさう云ふ思ひつきが自分に浮んだのはその時が初めてではない。既に先生の生前中にも何かそのポートレーを一つ書ければ書いておいて見度い。それは只自分一個の記念たるに止まらず、もつと公けの意味からも書きとめておかれる價値のある材料と自分には思はれた。先生は自分の傳記と云はれるやうなものを、遂にまゝとめては書かずには了はれた。又そ

れが「客觀的に一つの標本や、参考品になる變つたものでもなし、かと云つて主觀的に書かずにゐられぬ特別な氣持ちがあるでもなし」といふ理由で、書かうともされなかつた。それを一度すゝめて見た時先生は笑ひ乍らこんな警句を吐いた。「一體人類はレセツプスがスエズ運河を開鑿したと云ふ仕事の成績には眼をとめておくが、彼がどんな勉強ぶりと研究の結果その事業の成功を信じ得るやうになつたかと云ふやうな道行きには一々眼をくれるやうな面倒くさい事はしないものだよ。」

こんな風に先生は一方經濟的な物の見方もする人ではあつたが、勿論こんな事はごく内輪の吾々に對してだから呑氣に云はれた一種の諧謔で、さう眞面目にうけ取るべき言葉ではない。先生は何によらず動機を主にして、原因の方から物を見る事を第一とする人だつた。それ故、殊に若い吾々仲間の一人がもし同じ事を云つたとしたら、先生はきつと面白からぬ顔をして、一體仕事と云ふものの眞面目な意味はそんな打算的なものぢやあるまい、とか何とかその態度の不純さを非難されただらう。

只、先生は折々書かれる論文や感想以外に『自分と世界』と云ふ題目で、少し長い隨筆風なものを一度書いて見度いと云つてをられた。吾々も大いにそれを期待してゐたのであつたが、遂々その筆は染められずにしまふ事になつた。

ところで自分が先生について何か書き度いと云ふのにはまだもう一つ他に理由がある。ぼんやり惡夢を見てゐるやうな疲れた暗い氣持ちで、棺の安置してあるあの八疊の縁に、冬

枯れの庭に面して胡座をかいてゐた自分は、ふとあの藤井を見たのだ。そして奴が腕組みをしながら、あの金ぶちの眼鏡の奥でいかにも沈痛な面持ちで何か考へてゐるらしいのを見ると、「奴早速何か書くナ。」と思つたのだ。藤井は近頃専ら評判の文士である。が、それを見ると、例の先き廻はりをする癖で、奴の書きさうなものに對する大凡の豫想から、これはいつその事此自分が一つ先生のために何か書いておく義務があるやうな氣が自分はして來たのだ。自分は先生との昵近において、藤井より古くはないと云ふものの、先生の人と爲りや、思想や、趣味に理解と敬愛との深く純粹なる點にかけては何人にも譲らぬと自負してゐるものである。尤も先生は凡そ言葉と云ふものによつてその背景をうかゞひ知る事の最も困難な人の一人であつた。或る畫家は先生の顔を見て、よく見てゐると面白い味のある顔だが、一寸つかみどころがなくて畫には描きにくいと云つた。實際先生の肖像は二三畫かれた事があるが、どれ一つとして似たものがない。寫眞ですら感じの本當に出てゐると思へるものは殆んどないと云つていい。だから藤井が「先生には存外之れと云つた特色がない。」と云つたのには皮相乍ら一應の道理はある。つまり先生の味は水の味に等しく、説明の出來ぬ味である。文字や、言葉や、所作に現はれる外見の特色でなく、その日／＼の家常茶飯のうちにおのづとにじみ出てゐる人そのものの持ち味である。自然の奥床しさである。だから先生の講演を聴いたつて「先生」はわからない。その論文を讀んだつてやはりわからない。たゞ日常の生活の中にむき出しに出てゐてしかも隠れて

ゐる先生の木地をどこともなく味ひ得るものだけが眞に先生を知り、又愛し得るのである。そして一度その味を知り、又愛したものとつて先生の印象は恆久忘れられぬものである。

かくて自分が茲に書かうとし、又書き度い處のものも先生が無意味だと云つたその「傳記」でもなければ、「描きにくい」そのポイントでもない。いはんや、又僭越にも先生の意志を嗣いで、『自分と世界』の代筆をしよう杯と自分はたくらむものでもない。それは只自分の主觀に映じ、記憶に存するその恆久的な印象記であり、忘れられぬ愛のさまざまの回想録である。それが先生の云ふ如く一般の衆、もしくは人類にとつて興味があるかないか、又そんなものを書く事はじまる事はじまらぬ事か、そんな事は文士ならぬ自分の強ひて問ふ處ではない。素より自分が此文を草する以上、その氣持ちの中には人情として、先生に對する自分の個人的尊敬と愛とが出来るだけ汎く他人に同感される事を願ふ希望はある。但、それは謂はば第二義の氣持ちであつて、苟も自分の主觀に映じたる先生の價値を自分は他人に押し賣りはしない。先生を一種の平凡人だと見る者に向つて自分は敢へて抗議を申し込むまい。見様によつては先生は實際一種の平凡人にすぎなかつたかも知れぬからであり、且つ、突きつめて云へば、各人は畢竟、その動かすべからざる主觀々々によつて自分の見るやう、又見度いやう、萬象を見るよりなく、それから先きの事は、さしづめ神のみの知る事と、まあしておくよりないからである。

唯、少くとも自分にとつて幸ひな事には、葬式後十日目に、——自分はその間すっかり滅入りこんでゐたので、わると知りつゝ又氣にし乍らもわざ／＼泣きに未亡人を訪問する氣にはなれなかつたのである。未亡人や小さい人達を見れば、自分はもうそれ丈けで胸が一杯になる事をおさへられないであらうし、又未亡人は自分の顔を見ればきつと泣き出されるのだ。——それで漸く十日程たつて、自分の薄情と不義理をこぼされに、勇氣をふるつて出かけた時、自分が先生の思ひ出を書き度いと思つてゐる旨を告げると、未亡人は少からず喜ばれて、見覚えのある手帖を奥から二冊程持つて來られた。先生の座右には附きものであつたさう云ふノートは幾冊になるか知らん。先生の著作は大概その薄ぎたない小さな種子本から生れたと云つていい。しかし此の最近の二冊からはたうとう實がならずじつた事を未亡人は話して、

「ですから貴方がもし、その實をならして下されば、……喜ぶだらうと思ひますわ。」

かう云つてくれられた。

「尤もどんな事が書いてあるか、妾も讀んで見たわけぢやないんですの。妾なんぞが讀んだつてどうせ解らないやうな事が書いてあるんでせうし、それに何だか、妾が見てはならぬもののやうな氣もして、實は見るのがこはいんですの。」

庭の方を向きながらさみし氣な未亡人はなほかう附け足して、かすかに顔を赧くされた。未亡人は彌が上にも美しくなつて行く先生の安らかな記念を萬一の餘計な知識によつて傷け、亂し度くないのだ。

この未亡人の特別な御厚意に對して、いかに自分が恐縮と感謝の至りであつたかは云ふまでもなからう。勿論そこには面白さうで、吾々他人には一向意の掬みとれぬ、永久先生一人合點の斷想が、而も甚だ讀みづらい字でこゝかしこ走り書きしてあつた。が、自分としてはその中にさして意外な新事實にもぶつからなかつたのであるが、材料の局面は一段とひろげられ、従つて、『竹澤先生と私』と云ふ餘りに個人的にくぎられた題目は、今少しく一般的な意義を含めたものに改められる必要を生じた。かくて、責任の荷は更に一層重くなつたわけではあるが、自分は豫め題を決めこまず、もつと漠然たる自由な氣持ちで、思ひ出づるまゝにと角も此回想記を書いて見る事にきめた次第である。素より自分は眼前に積み上げられてゐる此豊富な資料を、只興味の故に逐一記録に遺さうと云ふ心算はない。無論あくまでも先生の良心と、神經と、趣味とを尊重して、かたくならぬ程度に敬虔な筆をとる覺悟である。自分らは生前の先生を生前の先生らしく生活させたかつた如く、又先生の死後をして、先生の死後らしく、葬り、祀つておき度いからである。

二

十何年前の、自分がまだ高等學校の學生であつた時代のある秋だつた。

名古屋から奈良へ行く汽車の中で、自分は偶然竹澤先生を発見した。込んでゐた車内がある驛で急にすいたので、やゝ離れた向ふ側に先生があるのに氣がついた。思ひがけなかつ

たので、自分は一寸胸がをどるのを感じた。とは云へ、自分はまだその當時、先生に格別の尊敬を拂つてゐたわけではない。又左程敬愛を抱くほどに先生を知つてゐたわけでもない。只、自分の義兄が先生の書くものを讀んでゐたので、名前だけはわりに古くから聞いてゐた。

尤も法科の學生であつた義兄は、「手當り次第に何でも讀む」仲間の一人だつた。そして讀むのは「吹く」ためだつた。自分では何にも解りはしないのだが、仲間の定評がさうなつたのであらう。彼は始めには「竹澤さん」を非常な尊敬し方で、「どこ迄大きくなるかわからない、日本人には一寸珍らしい豊かな謎の人」と推賞してゐたが、後には「やつぱりまア普通の日本人だね。一時は一寸買ひ被つたが、大したもんぢやなかつた。」とくさした。が、自分は此義兄を「買ひ被つて」はゐなかつたので、彼のくさし方を最初の推賞と共にさう取りあげる氣にはなれなかつた。

其後高等學校に入つてから、自分には愛知と云ふ、三年程先輩の親友が出来た。そしてこの愛知が先生の尊敬者だつた因縁から、自分もいつとなしに先生のものを讀むやうになつた。愛知は一度、先生の或る隨筆風な長い小説を自分に讀ませに持つて來た事がある。が、その頃の自分に何が解つたであらう。青年は何と云つても概念的なものである。最も囚はれない質の個性を持つたものでも、本當にすなほな自分の眼で自由に物を觀る餘裕は一朝一夕には贏ち得がたいものである。實は己れの奥深い天性と共鳴してゐる處があつて、牽きつけられてゐる乍らも、自分の意志や概念と矛盾したやうに

見えるものだと、そのまゝに享けられる事が出来ないで、どこかで自分を欺き、純粹に好感を持てなかつたりする。そんな時は愛知のやうな年長の知己の方が自分よりはずつとよく自分を見知つてゐて、わざ／＼そんな本を持つて來てくれたりするのであるが、何分自分はトルストイやイブセンなどに熱中してゐる時だつた。で、日本の作家全般に共通する一種安逸な野狐禪趣味、一寸した小才を見せ合つては嚴肅な問題を淺薄な警句で茶化し、早くもいゝ加減な小成にをさまりかへる、一言にして云へば餘りにもイージーゴーイングな不眞面目な傾向にひどく業を煮やしてゐる時だつた。さすがに「竹澤さん」のものはその作因から云つても、又内容から云つても、それら一般のものとは類を異にするとは自分にも認められた。が、それでもそれは要するに只普通より一段上の利口さから來る相違にすぎないので、矢張り一種の趣味のものと云ふ範圍を出ない氣がした。——たしかにあの嫌はれ者の竹澤さんをそんな風に見てゐたのはせい／＼自分位のものだつたにちがひない。——素より當時の自分とても、凡ての藝術が何もドストエフスキーや、ユーゴーの如き行き方のものでなければならぬと考へてゐたわけではない。が、やつぱり人生の全體に眞正面から深く強く肉薄して、何物をも回避しないと云つた感じが露骨に見えるものの方に一番牽きつけられるのは事實概念の仕業ばかりでもなかつたのである。しかもなんと云つても義兄からの影響はどこかに働いてゐたのであらう。自分はなぜともなく「竹澤さん」をさう云ふ風に——自分の所謂「第一義的な行き方」において——進んで行

く日本での稀なる眞率な人のやうに空想し、期待してゐたのだつた。そして竹澤さん自身も實はさう云ふ風に堂々として行き度かつたのであるが、天分の力の貧弱を自覺して、だん／＼樂な日本固有の世界へ體よく逃げ込みつゝある。そんな風に自分には思はれたのみか、更に打ちあけて云ふと、自分はそのに猶ほ案外世間的な意味、——孤獨と不遇とに堪へる氣力が、性格的にも、年齢的にも次第に弱まつて、そこに物質上の要求さへからまり、そろ／＼世間との妥協をし始めて來たのではないのか。高潔らしく傲然とすました顔の奥で狡るい色眼をつかひだしてはゐないか。——こんな疑ひさへ起るのだつた。事實先生の近作には稍／＼さう云ふ回避的傾向が見え出して來た氣がするのが自分には嫌になつたのであるが、此時愛知が持つて來た作には殊に、自分でその傾向を肯定しようとして、悪く云へば一種偽惡的な冷たさまでがわざとらしく眼について來たやうに感じられた。

そしてこんな風に見だすと、その事は何だか竹澤さん一人だけの事ではなく、日本人一般のどうしてもまつすぐに大きく伸び難い素質を暗示してゐる事のやうな氣がして、それが又若い自分を一方心細く感じさせるのだつた。

「たしかに先生の若い時代のものには君の謂ふ眞劍味とか、熱とかがもつと露骨に出てはゐるたね。近頃のものにはその點はずつとかくれて來た。」

或る時一寸議論のやうな形になつて、愛知は自分にかう辯解した。

「かくれて來たと云ふより、もと／＼熱が乏しいんじゃない

のかね。力が弱いんじゃないのかね。」

自分が輕率にもこんな批評を下すのに對して愛知は又、よしんばさうだとした處で、一體露骨な力感や、熱の感じは高い藝術にとつて強ひて「必要」なもんぢやない事、むしろ反對にそれは哲學の場合と同様に、高い藝術にとつては有害な障りとなり勝ちなもんだ。「好き嫌ひは別だがね。」と云ふ説を主張したやうに記憶する。が、要するにそれは茲にくだしく再録する價值のある議論ではない。畢竟僅か乍ら愛知と自分との年齢の相違の問題と云つてよかつたのであるが、自分はその故とはとらずに、性向の根本的な相違から來るものと考へたため、一時は愛知とも絶縁かと淋しい覺悟をした位ゐだつた。

ところで——前置きは長くなつたが——今此汽車の中で、殊に一人旅の手持無沙汰に倦んでゐた時、はからずも、その竹澤さんに逢つて見ると、自分の興味は少からずそゝられずにはゐなかつた。勿論、自分はその前にも折々本郷通りなぞで、寒さうに厚い外套を著て、血色のわるい顔にもぢや／＼と不精髯を生やし、何か考へてゐるらしく俯向きにボツ／＼と歩いてゐる「竹澤さん」の姿を見かけた事はあつた。それも多分、最初には愛知が挨拶した事によつてそれとわかつたのであるが、恐らくもし愛知の間接の紹介を通さずにも此方に觀察の餘裕さへあれば、人込みの中で行き逢つてもすぐ、「はア、これは竹澤さんだな」と自分は直覺しただらうと思ふ。なぜならそれはたしかに竹澤先生以外の何人の感じでもない。一寸注意して見れば極めて豫想通りの風格である。

しかも自分はその時、表にこそあらはさなかつたが、内心ではいかにもそれが意外な印象であつたかの如く、「ほう、こんな人かな。」と云ふ多少の驚愕と、好奇心とを禁じ得なかつたものと思ふ。——今や自分は先方が此方を知らないのを幸ひ、盛んに觀察をし始めた。

西向きの窓のガラスを透すやはらかい日差しを半身にあびて、先生は鉛筆を持ち、何かの本を膝の上に據げて讀みがてら、見るともなく窓外に走る景色に眼をむけてゐた。が、眺めるのではなく、何か思案に耽つてゐるらしく、時々口の中でモグ／＼と呟いたり、鉛筆で何か書き入れたりしてゐた。

が、やがて汽車が山間に入り、溪流に沿つてのぼりはじめると、先生の注意は次第に外の風物の方に向けられて來た。

雪。山。水。その山水のところ／＼に、さながら適宜な位置にちよこんと配置された陶器の置き物のやうな家々、のんびりと紫の煙がそこから立ちのぼる屋根の瓦の色、あるひは竹林の間などに見えがくれする壁の剝げおちた萱葺きの小家の形の面白さ。そんな畫がしきりに先生の興を引き始めたのが眼に見えた。

先生はもう本を閉じて景色の鑑賞に餘念がない。ちよんぽりと小さな澄んだ眸は、雲から嶺、嶺から溪流へ、溪流から人物へ、人物から水車へと轉々してはてしもない。熟睡の時のやうに心持ち口をあいて、時々頭をうちふつてゐる。その子供のやうな人の好い無心さ。抜けたやうなとても形容し度い樂天的な顔。もしそこに拘摸でもゐたらこんなお誂へ向きな鳥はないと思つたであらう。

幸ひそこには拘摸はゐなかつたが、その代り關西者らしい恐ろしく不行儀な大の野蠻人が、丁度先生の隣りに乗りあはせてゐた。傍若無人な態度でいぎたなくふんぞり返へつてゐたが、先生が夢中で眺め入つてゐるその窓からさす日光が顔に當るのが眩ぶしかつたのであらう。いきなり大きな半身を起すが否や、さも腹立し氣に一言の斷わりもあらばこそ、ピシヤンとそのフラインドをしめて了つた。まさか怒りもしまいがと思ひつゝも先生はと見てゐると、一寸鳩が豆鐵砲を喰つたやうな顔をしたが、ひよいとその隣りに席をうつした。そして依然としてその窓から景色に見惚れてゐる。虚心な表情は素より微塵も變らぬ。

一方ひどく氣むづかしい重苦しい感じの人のやうに先生を想像してゐた自分にとつてそれは實に意外に柔かな、輕快な感じであつた。

しかし大男の狼藉はまだそれには止まらなかつた。隣りの席があいたのにつけ上つた彼は今度はそつちへ靴を穿いたままの兩脚を無遠慮に伸ばし、大々と寝そべりだした。しかもその靴の先きは亂暴にも先生の外套に觸れた。自分はそれを見ると流石に少し腹が立つた。彼はその脚を縮めようとしな

いのみか、圖々しく先生を押しのけようとさへしてゐた。今度は先生も怒るだらうと思つて自分はなほ成り行きを見てゐた。先生は一寸こつちへふり返へつた。勿論多少の不快は感じたにちがひないが、表情に變化が見える程ではなかつた。そしてその先の席がまだあいてゐるのを見ると、又ひよいと身輕に起つて、もう一度席をうつした。そして相變ら

ずどこを風が吹くと云つたやうな顔で本を見たり、景色を見たりしてゐた。

素より誰でも、自然の美に見とれるやうな閑散な時には、おだやかな虚心の氣持ちになるのが自然である。とは云へ白痴か何かならいざ知らず、自分は大人のこんなわだかまりない虚心な顔を嘗て見た事がなかつた。たしかにそれは今時の世間には一寸見られぬ代物である。不作法な狼藉者に壓迫されて、恰度仲間に押された小鳥が一つの枝から次ぎの枝へひよい／＼と位置を替へるのにも似たすなほさ、と云ふよりもむしろ無感覺さで、おとなしく席をうつしてはぽかんと外の景色を眺めてゐる先生の顔。鷹揚な暢氣さの中にもどこか寂し氣な、意志の強さうな中にも涙もろさうな、人のいゝ顔。此方が眞心を以てうちあけて出れば、鉦を敲くが如く、向ふからも直ちに眞心を以て打ちとけてくれさうな顔。自分はそれを未だにあり／＼と眼前に浮べる事が出来る。實にそれは何でも無い、一場の主觀的印象にすぎなかつたのであるが、偶然にもその狼藉者の見苦しさとの對照によつて、とに角始めて先生の風格に一面的にもせよ接した自分には、それは一種上品な、大そういゝ感じであつた。

自分は「竹澤さん」を少し淺く誤解してゐたんではないか？ 事によつたら自分が思つてゐたよりは案外ずつと高い、大きな天地に眞に悠々と生きてゐる底の人ではないのか？ そんな氣がした。

それから二た月程経つて後、上野の表慶館に愛知らに誘はれてかの『因果經繪卷』などの出陳を見に行つた時、丁度又

そこに新しい二度目の奥さんをつれて來てをられた先生に會つて、少しも矛盾した氣持ちなくすら／＼と紹介されたのも、實は此時汽車の中でヘンに好感を持つて了つたのが重なる原因であつたと思ふ。

竹澤先生富士を觀る

一

「山登りつてものは之れで中々シンボリックな感じのあるもんですね。先生。」

元氣よく先登をつとめながらかう云ふのは感想家の愛知だつた。

「さうだね。」とうしろで先生が答へた。

「たゞ漠然と絶頂ばかり目がけて、一氣にそこへ行き著かうと無暗に踏んばつたつてやつぱり駄目ですね。今度はあの天狗岩の處までとか、その次ぎはあの旗のたつてゐる掛け茶屋までとか云ふやうに、さし當り手近かな目標を次ぎ／＼と途中にたてて、一段づつのぼつてゆくのが利口だつて事を思はせられますね。」

「うむ。」

「一つの坂をのぼつたために又やれ／＼と思ふ坂が上に見えて來る。しかし勇氣をふるつて一息ふんばるとその坂も越えてしまつて、先刻高い處に見えた掛け茶屋がいつしか遙か足もとに見える、つて云ふ風に、上を仰いだり、下をながめた

りしてだん／＼眼界の廣い處へ到著して行くとところが面白いんですね。」

「そんな事を云ひながら、君は上ばかり見て、一向足もとの景色を鑑賞しないぢやないか。休み／＼一服して清風を賞するでもなければ、道端の花に眼をくれるでもなし。殺風景な事、まるでマラソン競争だ。」

先生の云ひ方が息苦しさうな中にもヘンに馴れたので一行は笑つてしまつた。

「ぢや一服しませう。」

と愛知も立ちどまつて振りかへりながら、にこ／＼と此方を見おろして白いおでこの汗をふいた。

時は初夏の朝。場所は箱根の乙女峠。登場人物は二度目の新婚の夢未だ圓かなる先生夫妻と、愛知と自分との四人である。

母と二人で仙石に来てゐた自分は此朝突然三人の訪問を受けたのだつた。尤も竹澤さん夫婦が丁度その當時木賀に来てゐる事は聞き知つてゐたが、訪ねもせずにあつた。そこへ或る時ふらりと愛知が遊びに来て、有名な乙女峠の富士を朝の中に見ようと云ふので先生夫妻を勧誘して、自分を誘ひに來たのだつた。

「君の寢坊を一つたゞき起してやらうと思つてたんだがしくじつたよ。先生と來た日にや君の上は手なんだからね。」

それでもすが／＼しい夏野の朝風がひいやりと吹きぬける馬車の中で愛知はかう云つた。芋の如く揺られる事七八分にして一行は乙女峠の下でおりました。

「まあ、いい風ですこと。」

廿九になる奥さんは、杖に衝いた蝙蝠の柄に身を凭せながらホツと一息つくと、かう云つて仙石原を見渡した。一寸異に思はれるが、奥さんは前にさる軍人に嫁いで、早く後家になられた人である。お子さんはなかつた。尤も親御さんが退職の軍人であつたと云ふが、どう云ふ行きさつで先生に再縁される事になつたのか、その邊の消息は未だに精しくは知らずにゐる。とも角聰明な、美しい、そしてどこか粹な感じのある人である。ちぢれ毛と云ふのではないが、眼立つて曲のある髪で、又その曲のある黒髪で地味な鬘に結つてゐるのがいかにも奥さんの美にびつたりして、先生の氣に入り相な感じだつた。しかし奥さんの最も美しい部分はその清涼な眼と、襟にある。殊にかうして横から斜めに見る時、その襟あしの美しさが眼についた。

甘さうに一服をふかしながら、にこやかにそつちを見上げて、くたびれたかと先生が訊くのに、

「いいえ、ちつとも。妾、三里くらゐの山道は平氣ですの。」と奥さんは答へた。たしかに紫の裾を端折つた奥さんの白い脛は細く、スツとして、先生のよりは健脚さうに見えた。「どうも先生の方がお樂ちやなさうですね。御老體だけに。」

愛知にかうからかはれて、先生は「なあに、この位。」と負け惜しみを云ひ乍ら、もう僅か三四丁程しかない絶頂を見上げて、「大變だな」と云ふ顔つきをした。

「だつて何も醜態して無理に汗を流すことはないぢやない